



坂内 久・大江徹男 編

『燃料か食料か』

バイオエタノールの真実 』

本書は、近年世界的に注目を集めるバイオ燃料について、ブラジル、米国等、主要な国・地域の動向、その内包する問題等を多面的に分析したもので、このテーマの有する錯綜した課題を鳥瞰するうえで、極めて有益な一冊と言えよう。分担執筆している各著者が、それぞれの国・地域の農業に関する専門家であることが、本書を単なるジャーナリスティックな紹介にとどまらない、厚みのあるものとしている。

本書の構成を概観すると、～章がそれぞれブラジル、アメリカ、中国、EU、東南アジアの各国、地域におけるバイオ燃料生産の歴史的経緯、現状、参画主体等を紹介したものとなっている。これらを通読すると、バイオ燃料の位置づけが、既に世界的にかなりの広がりを持つものであることが、改めて認識させられる。ブラジルにおけるバイオエタノール生産とアマゾン森林破壊との関係、アメリカにおける「新世代農協」の動向、中国における食料問題との関係、EUにおける環境政策との関係等、それぞれの国・地域ごとに興味をひかれる点が多いが、特に東南アジアにおけるパーム油生産の広がりとその影響については、環境破壊、大規模プランテーションの展開による農民の収奪、食料との競合等、バイオ燃料の持つ光と影が縮図のように示されており、印象に残る。

これら、各国・地域ごとの動向を縦糸とすると、続く3つの章、「アメリカの環境政策とバイオ燃料」、「エタノールとアメリカ産トウモロコシ」、「バイオ燃料とセルロース系エタノール」は、いわば横

糸として、(米国を例示しつつも)バイオ燃料に共通する課題を取り上げたものと言えよう。章においては、世界的なバイオ燃料生産に大きく関与している国際農業資本とそれに対抗する国際石油資本が、互いに「環境政策」を標榜しつつ、どのように対抗し、どのように協調していくこととなったかが述べられている。また、章においては、本書の表題でもある「燃料か食料か」という問題に関し、米国における作付けの選択がどのように行われたかの具体例により、その競合関係が示されている。章は、全体のまとめという位置づけで、バイオ燃料と食料問題、環境問題の関係を総括するとともに、新たな発展の方向としてセルロース系バイオ燃料の技術的可能性が述べられている。

各章ともに示唆に富むが、本書の表題でもある「燃料か食料か」という問題に関してはやや不満が残る。最終章においては、今回の食料価格高騰に関し「定量的な分析を行っておらず、どの程度の因果関係があるか断定できない」とし、むしろ「サブプライムローン」を契機とする金融不安が引き金となり証券などからシフトした資金が大量に先物市場に流入したこと」が直接的原因、とされている。前段については研究者としての良心を示すものであるが、やや慎重にすぎ、後段についてはむしろ根拠に乏しいように感じられる。食料と燃料という二つの井戸にバイオ燃料というパイプが連結された時、たとえその太さが定量的に把握できずとも、両者の水位には密接な関連が生じざるを得ない。これは、やはり一つの「パラダイムシフト」と考えるべきであり、そうした視点から、現在の国際的な食料供給体制等に対する問題提起があってもよかつたのではないであろうか。

日本経済評論社 2008年7月

2,600円(税別)287頁

(取締役基礎研究部長 原 弘平・

はらこうへい)